

2019年度 第17回講演会 記録

日 時	令和2年1月18日(土) 13:00~16:00	
会 場	此花会館 梅香殿	
講 師	哲学者 内山 節 先生	
演 題	伝統回帰の思想：森とともに生きる	
備 考	参加者 175 名 (内聴講2名)	記録 船本浩路

はじめに

【田中先生】

内山先生は大変お忙しくご活躍され、1年前にご予定を伺ったときに空いている土曜日は唯一今日だけでした。先生は東京と上野村の両方に暮らしの拠点を持たれ、40年に及ぶ上野村での暮らしを通じて培われた伝統回帰の思想は、時代を超えて大切なものを守り続け、それを支える新たな技術を有効に活用しながら、次の世代に伝えるかのお話しは、今年度のこの講座のハイライトであります。

内山先生のお名前は森里海連環学の構想を進める中で、先生が信濃毎日新聞の連載を2005年「里という思想」という本にされた時に知りました。その後、幾つかのシンポジウムで講演をお聞きし、ハット気づかされることが多くあり、今日の講義を実現するに至り、どのような気づきになるか大変楽しみにしています。我々のこれからの生き方の模索には、根底にある哲学的な事柄が本当に大切に、今日はそのことをゆっくりお聞かせいただきたいと思っています。どうぞよろしく申し上げます。

【講演要旨】

1. 群馬県上野村について

内山です。生まれは東京ですが、小さい頃から魚釣りをしていきまして、二十歳過ぎたころ上野村にたまたま行ってこの村が好きになり、その後家も譲ってもらい上野村に長期滞在しています。一年を通すと、仕事の都合もあり、東京が1/3、上野村が1/3、後1/3は講演などで出歩いています。

上野村に家と畑(200坪)と裏山(1ha)があり、そのなかで暮らすのが大好きです。いまは畑を休みにしていますが、その一番の理由は動物の被害です。上野村にはシカ、サル、クマなど何でもいて、クマは2グループいるようです。一つは山の中にあるグループ、もう一つは村周辺に下りてきたグループです。

村に住んでいる我々にとってクマはそんなに怖い動物ではありません。

クマは臆病で気も優しい動物ですが、慣れない人はクマの習性を知らないので、クマを慌てさせ怖くしているのです。あるとき、村人が山道を歩いているとクマに会い、そこで村人は山の尾根に入りクマを巻いたと思ったら、クマも同じことを考えていたのか、尾根の途中で再び出会ったそうです。村人はクマに背を向け歩き出すとクマも同じことをしたという話を聞いたことがあります。数年前に家の近くで出没した時、村役場に通報すると駆除されるので周囲の人と相談して連絡しなかったが、しばらくして秋になると山に帰って行きました。

家の畑を荒らすのはシカ、イノシシ、ハクビシン、サルです。畑を電気柵で囲い、高圧(1万ボルト)の電気を流す対策をしていますが、電流量が少なく衝撃をある程度与えても死ぬことはありません。私も間違えて手を触れたが、大太鼓を打ったときの振動くらいでした。イノシシは柵下に溝を掘り、お尻から柵の下を潜り抜け畑地に入る、お尻が触れても大した衝撃がないこと知っているようで、抜本的対策を考えないと被害は防げないようです。

50年近くに及ぶ上野村と東京の二重生活ですが、上野村の人たちのバックアップもあり村の中にすっかり溶け込んだ生活をしています。



山村、農村といっても地域で人情が違います。関東、東北の村人は外から来る人を歓迎する傾向がある一方、西日本ではよそ者扱いすることが多いようです。その理由は、西日本は古代から人口が多く、外から来た人に自分たちの生活基盤が削られるという不安があるからで、関東や東北は人の数より自然の恵みが多く、薪も水も豊富にあり気にしなくてもすむ。そういう地域では外からの人が物や知識や情報を伝えてくれるというプラス志向の受け止め方をします。

上野村は、現在人口は約 1,200 人で、その内 270 人が移住者というか I ターン者です。過疎化という言葉はなにを基準にしているのか。上野村は明治に 7 つの村を併せ上山郷から上野村になって以降、一度も合併していません。上野村は江戸時代から人口は 1,000 人程度であり、その時代を基準にするとむしろ人口は増えていることとなります。

昔は木炭の生産が盛んでした。炭の大量生産が始まったのは明治からで、炭は火持ちがよく便利だが薪に比べて熱量はそんなに高くなく、煮炊きには薪を使い、町でも薪の需要は多かった。炭は元々多くの需要があったわけではないが、明治時代になり近代産業育成のため工業用木炭が必要になったのです。イギリスの産業革命では初期のころは木炭を使っていました。コークスがつくられる前の石炭は不純物が多くよい鉄ができなかったので炭を使った。化学工業も今は石油を使うが、昔は木炭ガスを利用していた。明治時代になると木炭の増産を国が推奨し、炭焼きが全国に展開されるようになりました。国が推奨しても上野村の人は暇な時以外は炭を焼かない。上野村はその頃は養蚕（生糸の生産）が中心で、紙透きも行うなどいろいろな生業がありました。

炭焼き専門家は村外の農家の次男坊か三男坊で、焼いた炭の半分を材料代として山の所有者に渡し、残り半分が自分の所有になりました。炭焼きの場所を決める手配師のような人がおり、勝手に山に入ることはできなかったのです。手配師の搾取がすごく炭焼きの収入は良くなく、焼いている期間だけやっと暮らせるような状況でも上野村にはこのような人が 1,500 人もいた時代がありました。しかし需要が徐々に減少し、1960 年頃高度成長が始まっていたので、炭焼きの人びとは都市部に移り、土木作業員で生計を立てるようになりました。

第二次大戦後東京が焼け野原になり、親戚や知り合いを頼って村にやって来た人達が 1,000 人以上いました。最も人口が多いとき村民は約 4,000 人、内 2,500 人は疎開してきた人と炭焼きの人でした。この村は昔から 1,000 人ほどで村を維持してきたので「過疎」の指摘はあたらず、問題は持続できる村がつかれるかどうかと考えます。

上野村は日航機墜落事故で有名になったが、群馬県内でもどこにあるか知らない人がいます。まして関西の人は知らない人が多いと思います。村の 96% が森林で、どんな山村に行っても少しの水田があるが、上野村は隣村を含めて全くありません。江戸期は幕府の直轄領でした。米の生産が出来ないのに天領であった理由は十石街道の取り締まりです。中仙道は、軽井沢から高崎に抜ける途中に碓氷峠があり大変な難所で、馬も通りにくいので脇街道がいくつもありました。碓氷峠も改修が進み馬が通れるようになったが、それまでは上野村を通り江戸に行くコースが主だったので、上野村に関所を設け、その管理のため幕府直轄領にしたのです。年貢は木で納めたが幕府は関所の管理に忙しく、実際の取立ては緩かったようです。江戸時代の日本の農民は、米は生産性がよくないので米より桑畑（斜面で作れる）、綿（江戸期）、菜種油を作りたかったのです。

私が上野村で生活を始めた 1970 年頃は生糸の生産のためにカイコを飼っている家が一軒だけありました。今は作る人はいなく、紙透もしていません。村経済を支えていたのはコンニャク（山の傾斜地に適していた）でした。高い値段で売れ、商売としてよかったが、品種改良で山の傾斜地でなくても生産できるようになると、広い農地がない上野村では成り立たなくなりました。

2. 上野村がつくりだしてきたもの

(1) 森の手入れ、製材、木工の生産、木質系ペレットの生産、ペレット発電、茸の生産、自然と村の雰囲気を活かした観光

こういう状況の中でどのようにして持続可能な村を作るか？ 96%が森林なので森と共に生きることを基本にしないと持続性がないこととなります。この村には自分たちで何とかしようという気概があります。村外から何かしようと出された案はだいたい反対される。バブルの頃にあったゴルフ場計画（2か所）も工事に必要な水を使わせないとか、色んな手段を使って開発させないように村民が阻止しました。外部資本による観光開発も全くありません。

今の森の使い方は、森の手入れのために働いている人がおおよそ30人くらい。その内の5人くらいは請負でやっている人たちで、請負会社は村民がつくっている。あと25人くらいは森林組合の作業班として働いています。これらの人は全員が移住者で、平均年齢も若い。移住者と言っても古くからの人はもう30年も働いています。上野村の山は急峻で、森のすべてに手を入れることはできないし、また必要もない。奥山の天然林は自然に任せるのが良い。森は区画割しながら管理している。山が急峻なので木を切り捨てて放置すると災害の原因になるので、伐った木は下まで運び出し、搬出木材は森林組合で製材します。天然林も多く、時々良木（ケヤキなど）が出てくる。

村には木工職人がおり、村で育成した20人くらいの木工職人がいます。村の職人は椀などの食器や家具づくりなど、それぞれに得意な技術でもって製品作りに励んでいます。

良木は製材し柱や板、木工の材料などに加工しているが、このように使えない木が全体に60%程ある。この木材は村のペレット工場で木質系ペレットの生産に使用しています。そのペレットは今の季節、暖房にも使うが、村にある4つの温泉（冷泉）の加熱用の燃料として、また農業用ビニールハウス暖房用として使っています。また、ペレットの約60%は発電に利用しています。将来的にはこの地域の電力自給率を100%にする目標ですが、ペレット発電だけでは無理で、他のいろんな自然エネルギーを組合せる必要があります。現在、役場中心に検討を進めています。

ナラの木（コナラ、ミズナラ）はキノコ生産のための菌糸の植え付け用のオガ屑として利用しています。キノコの出荷額は約4億円、使用済オガ屑はペレット化、その設備が4～5年前に完成し、完全にリサイクル体系が出来ました。そんなことをしながら森をよくしていく。上野村の森は昔の雰囲気をよく残しており、この豊かな自然をしっかりと保全していこうと考えています。これが観光資源になり、一年に20万人程度が上野村にやって来る。観光客の村の人口に対する比率は高く、開発された観光地には行きたくないと思っている人たちがやって来る。森の手入れは観光資源を育てることに繋がります。

(2) 持続可能な地域労働体系をつくる

自分達の地域は経済発展が遅れているから衰退したと言っている人が市町村長さんの中によくいます。この発想は間違っていると私は思っています。例えば地方の商店街でシャッターを閉めている店で、経済が衰退し駄目になったと言いつつ、しかし東京、大阪の街中にはシャッター通りがない。それは経済が発展しているからではなく、頑張っただけで店を閉めないと生活していけない危機感をもってからです。街中にはレストランも小売店もあふれるほどあり、競争は激しいが店を閉めてしまうと生きていけないので頑張るのです。

地方の商店街でシャッターが降りている店があれば羨ましいともいえます。なぜならシャッターを下ろしても生活できることは、豊かさの一面でもあります。経済の発展が遅れ地域が衰退したという考え方はすべてに当てはまるものではありません。

働く場所がないから若者が来ないという考えも間違っています。働く場所というのは雇用先を探している人からみれば、いくつもの選択肢がなければだめなのです。例えば、土木会社で、土木作業員を募

集しても働き手が来ないことがあったとして、これをどう考えるかです。

仕事を探す人の立場からは、いろいろな仕事があり選べることが大事で、一つや二つあっても不十分であり、またいくつか揃えたとしても働く人にとって果たして魅力ある職場かどうか問題で、その地域ならではの魅力ある労働体系を作ることが必要なのです。

(3) 共同体的村と地域労働体系

上野村にはコンビニがありません。しかし、村人はそれを結構自慢しています。なぜかという隣の家がコンビニだからで、まさに何かちょっと足りないものがあれば隣の家に行けば解決するのです。普段から助け合っているので村中がコンビニなのです。

私は去年村にいた日数が極めて少なかったのですが、一番の理由は家を改修していたからで、つい最近まで風呂と便所と台所が使えませんでした。風呂は村に温泉があり、台所も無くても誰かの家に行けば必ずご飯ぐらい御馳走になれます。困るのは便所ですが、ようやく最近出来上がりました。

普段からの助け合いを大事にしながら観光にもつなげていきたい。そういう村と一体となった地域労働体系をつくる。この村だからこういう仕事がある。そういう世界を作りたい。森林を使った経済を作るのではなく、森林を使った持続的な労働体系を作る。しかもその労働体系が村の共同体と一体となった形で存在する。そのような労働体系をつくりたいと思います。

3. これからの地域づくりと伝統回帰

(1) 共同体的村を守る

上野村は森林が 96%もあるので資源的には持続性があるといえるが、それを使って人が働き続けることが出来る持続性があるかどうか重要で、そこをうまく作っていくことが大切で、ペレット発電とか、いろいろ新しいことをやっていますねとよく言われます。現象的にはそうなのですが、我々の考え方は新しいことをやろうとしているのではなく、伝統に戻ろうとしているのです。

(2) 地域資源をエネルギーとして利用した時代に戻る

この村のエネルギー源は地域から生まれるものを利用していました。それは薪が 99%、水が 1% (水車) で、その頃の時代に戻りたい。と言っても木を切り薪を作るのは殊に高齢者には大変です。そこで、ペレットを暖房に使ったりしている。今のペレット発電は外気を取り入れて燃焼させ、暖気を室内に伝播させて、排気 (燃焼ガス) は屋外に排出します。品質のいい石油ストーブと同じ感じがする。温度設定、予約時間に着火、消火も自由に設定でき、高齢者にも非常に使いやすいです。

粉ひき用として使われていた水車は小規模な水力発電用としての利用を考えています。また、もう少し使い勝手のいい電気自動車ができればガソリンも含めて地域電力ですべてを賄うという可能性も出てくる。そこで、村が各家の屋根を無償で貸してもらい太陽光発電による電力会社の立ち上げも検討しています。メガソーラーは環境をこわし景観もよくないので反対です。風力発電 (不気味なでっかい羽根がある) も、空は人間だけのものでないので、鳥の許可をもらわなければならないと、村の人たちは消極的です。

村には 3~4 箇所急速充電器を作っているが、残念ながら電気自動車がない。村役場が軽の電気自動車を買ったのでそれには充電しているが。一見新しい取り組みのように思われるかも知れないが、考え方としては共同体として地域エネルギーと地域の資源で暮らしてきた時代にもどることなのです、伝統回帰とはこのことを言います。

(3) 伝統回帰を実現するために新しい仕組み、技術を導入する

島根県の離島・隠岐の島の海士町 (あまちょう) には、都会から若い連中が沢山やって来て、彼らは自由に地域の活動をやらせてもらっていることがマスコミでも紹介され、近年有名になりました。外からの若い人を住民が歓迎しなければ行動には限界があるが、海士町には都会から来た若者に自由に

やらせ、中には一緒に活動する町民もいます。それは全体の 1 割程度残りの 9 割は黙って見ているが足は引っ張らないし、特別に応援もしない。1 割の人も 9 割の人も昔からの島を守りたいのです。

彼らは新しいものを元にして島作りをやるうとは思っていない。昔からの島をどう維持するかを考えている。昔からの島を守り、その上に新しいものを導入したいと考えているのです。その点は上野村と全く同じで、新しい人に来てもらったり、新しい技術を入れたりする必要があります。

上野村でやっている伝統回帰とは昔の形に戻ることではなく、むかしの時代にあった仕組みからヒントを得ながら今に生かせる方法を新たに作っていくことです。上野村はそのような視点でいろんな試みをしてきました。

例えば、今から 25 年前インターネットが一般家庭でも使われるようになり、どんな山奥からでも世界に発信できるし、世界の情報が入ると盛んに言われました。果たして本当なのかどうか、上野村で地域作りインターネットが有効かどうか実験で検証することになりました。すべての村民が利用できるように、村がプロバイダーを開設し光ファイバーで繋ぎました。村民全員にアドレスを提供し、回線利用料を月額 500 円に設定し、同時にパソコン教室で村民に使い方を教えました。結論を言うとこんなものは地域作りには有用ではないとの結論になりました。つまり、上野村の HP で観光情報発信と村の人と親しくなればメールのやり取りができるが、肝心の地域作りは人間同士が顔を合わせて向き合い、肉声で話しあうの積み上げでしかできない。十何億投資したけれども・・・というものでした。

4. 今日の社会改革運動と伝統回帰

(1) 自然とともに生きる、コミュニティ＝共同体をつくる試み、コミュニティビジネス、ソーシャルビジネス

今の時代に抵抗感を持っていて、そしてこの社会を少し変えようと思って活動している人が、いろんな所で、いろんな分野に進出してきています、彼らが求めているのは伝統回帰なのです。例えば、日本中で壊れてしまったコミュニティを再生しようというのはその例です。それは昔の人はコミュニティを維持してみんなで仲良く暮らしていたのです。但し社会のありようが変わってしまっているのです。昔のコミュニティの作り方と今のそれとは少し変えていく必要があります。それは僕らが薪の時代に戻りたいと思うことに対し、ペレットを作っているようなもので、そういう変化は受け入れる必要があります。コミュニティと共に生きていくようなそういう時代に戻る点では伝統回帰なのです。

多くの人が自然と共に生きる社会を作ろうとしていることは、昔の人が自然と共に生きてきたことから伝統回帰なのです。それとコミュニティビジネスとかソーシャルビジネスとか言われているような経済活動を始めている人たちがたくさんいます。コミュニティビジネスと言えば、よくあるのは皆の溜まり場になるようなカフェを作ったり、レストランを作ったり半分は商売でもあるが、むしろコミュニティ作りの一環としてお店をやろうとしているのです。ソーシャルビジネスになれば、その活動を持続させるためにビジネスとしてそれを展開する。これは、私の関わる NPO（全国対象の森林ボランティアの保険サポートをサービスする）を考えると全国的組織でやっているのでもどうしても事務所と専従職員が必要で、給料を払わないといけない。NPO なのに会社経営的一面が入ってくる。しかし、利益を上げることが目的ではなく NPO の使命を果たすことが目的なので、これも一つのソーシャルビジネスのようになっていく。自分たちの願っている大事な社会を実現するために事業も成り立たせる。そういうありかたが求められる。これもまた伝統回帰なのです。

日本での経済活動は、元々人の役に立とうとして、あるいは地域の人たちの役に立って地域発展に貢献しようとして始まったものが多く、電力会社もそうです。地域の人たちに電力を配るために地域の金持ちたちが共同出資して小規模水力発電を造って地域電力会社を作ったのが出発点です。

その時の一番大きな目的は農業用水の確保でした。電気を起こして、揚水ポンプを使って水をくみ上げて田畑に流そうと言うことになり、電力会社ができたのは多くの場合はこのケースでした。それで、余った電気を集落に分けて電灯になっていく。その後、小さい電力経営体が連合を組んで、融通しあえるようにして電力の安定化を図った。昭和の戦時体制になって国策となり全部統合されて日本電力という会社がつくられ、戦後 GHQ の方針で北海道電力から沖縄電力まで全部で 10 電力会社ができました。

電力会社は元々ソーシャルビジネスである。しかし、いつの間にかソーシャルビジネス会社の性格が消えて政治家と結託して自分たちの利益しか考えない会社になっています。だから、今ソーシャルビジネスを起こすというのは新しいビジネスを作るというのではなく、昔の日本の人たちの企業を作ったり、経済を発展させたりしたあの精神に戻ろうと言うことです。その具体的やり方には新しい方法を取り入れる。例えば、フェアトレードは全く新しい発想ですが、経済活動を通してよりよい社会を作っていくのだという点では昔の形と考えてもよいでしょう。

(2) 健全な移動性をもつ社会

日本は定住社会と言われるが、実は歴史的にも移動性の高い社会です。移動しながら定住する社会といえます。かなり昔から住んでいるといっても江戸時代頃からが多い。日本は自然災害が多いので、定住したくても移動せざるを得ない事情があります。今、上野村に移住者が増えてきたことは、伝統的な農山村の形であると僕らは思っています。

近年農山村への移住者がいなくなり、高度成長期あたりから苦しくなってきました。昔は養子に迎えたり、行商人が住み着いたりして移住者が村に力を与えてくれた、伝統的な村の姿がありました。高度成長期には都市部へ出ていく一方になり衰退していったが、現在、移住者を村に迎え入れることは新しいことではなく伝統的な政策です。今は、養子を迎えることがなくなっているので、役場は工夫して種々の仕組み作りをしているが、伝統回帰の一事例です。

5. 持続可能な関係性を求めて

(1) 自然との関係性、人々との関係性、「外部」の人々との関係性、個人の時代から関係性の時代へ、その意味でもすすむ伝統回帰

今、宗教勢力は衰退期に入り、幕末ごろに興った新興宗教、例えば大阪では PL 教団（大正時代から）などが代表的ですが、信者数が減少してきています。日本人の宗教への関心は間違いなく低下しているが、信仰心が無くなっているのかというと、そうでなく逆に信仰心が復活してきています。例えば自然の中に神仏を見るという自然信仰。それをごく普通に受け入れる人たちは非常に多くなってきました。私が教鞭をとっている大学院の学生と一緒に夏にゼミ合宿をするが、どういう合宿をしたいのかと尋ねると、私の村で滝行をしたいという。そこで実行したら気に入られた。今はとっくに大学を辞めているが、ゼミ合宿は継続してほしいとの要望があり去年もしました。一応昔の山岳信仰、修験道のやり方でやっています。気が引き締まるというので、全員白装束で般若心経を唱えながらやっています。滝行により昔の人の気持ちを感じながら自然とつながり、自然の気が体に入ってくる。やると体が軽くなる感じがします。頭で知るのではなく体で覚えていく。その中で自然にはこういう力もあることを感じ取っていく。このようなことへの関心はものすごく強く、修行に行つて山伏の資格を取得した学生もいます。

お寺の檀家以外の人にも寺を開放してたくさんの人にきてもらい、種々の活動をしている寺があります。これこそが本来のお寺の姿です。

日本では今、信仰心的なものが復活してきているように感じます。死後の世界はあるかという問いに、死んでも魂は無くならないと答える人が若い人に多くなってきました。若い人でも危ない目に遭ったりすると、死んだおばあちゃんが助けてくれたとか、おじいちゃんが守ってくれたとかを普通の感覚で言う人がいて伝統回帰が結構進んでいる感じですが。

日本は日常の生活の中にいろんな信仰が存在したが、「宗教」というようになったのは明治以降です。本山の僧などは別にして、一般の人達にとって生活の中に神様がいたり仏様がいたり、亡くなったおじいちゃんがいたり、おばあちゃんがいたりする世界は日常的なもので、特別な何とか教に属するものではありませんでしたが、明治になると現在のような形になり、今壊れ始めています。一方では、何らかの困難に遭遇し危険から逃れたとき、おじいちゃん・おばあちゃんが助けてくれたと感謝する受け止め方が復活してきているのです。

「宗教」や「信仰」という言葉は明治になってできた翻訳語であり、江戸期までは宗教とか信仰という言葉はありませんでした。人々が神様や仏様に手を合わすことは普通にやっていたのですが、それを「宗教」、「信仰」という言葉でくくる発想は明治になり、外来語を翻訳する都合上できたものです。

明治以降に神社や寺の多くが作り変えられました。明治以前は大きなお寺は神社を持ち、大きな神社はお寺を持っているのが普通でした。神社にお坊さんがいたり、お寺に神主さんがいることはよくあったのです。明治になりこの形態が壊された。伊勢神宮は江戸時代までは境内にお寺がたくさんありました。神仏習合だったので天照大神は大日如来の化身であり、天照大神に手を合わすことと、大日如来に手を合わすことは同じで、そういう位置づけの場所だったのです。明治になって伊勢神宮はお寺を一掃しました。

神社に行ってお参りをするとき、普通には二礼二拍手一礼しますが、江戸時代まではそれぞれの神社は独特のお参りの方法がありました。明治になり強制的に統一され今のやり方になりましたが、そのようにできなかったのが出雲大社です。出雲は国を譲ってくれた所なので強制できず、こうしなさいと言えず、出雲大社はいまも四拍手です。昔からの本来の姿に戻ろうとする動きがあります。例えば高知県のある神社は、神主さんが祝詞をあげた後、懐から数珠を出して南無阿弥陀仏とお経を唱える昔の姿に戻そうとしています。ちなみに私の住んでいる集落の小さな神社は長老たちの共同提案で神社本庁から脱退した。その理由は明治になって強制的に神社にされたからその前の形である神仏習合に戻してから死にたいと申し入れがあり、満場一致で可決されました。神社本庁に通告して無事脱退し、今は神社でもありお寺でもあることになりました。明治以降のお寺や神社の在り方を、我々は見直さなければいけない時期に来ていると思っています。

以前、講演先の地元の人が「松下村塾が世界遺産になったが、あれが世界遺産なら IS がつくった学校も将来世界遺産になるんだね」というのです。なぜかと聞くと「若者を洗脳し、やっていることは同じだから」と。吉田松陰が教えていた講義録的なものに「早く日本を天皇のもとに統一し、それが終わったら朝鮮を奪い、次に台湾、フィリピンだ。」と書いてある。このような指導をしていた松下村塾が世界遺産であれば、IS がつくった学校も将来世界遺産になってもおかしくないという理屈になります。このような明治以降の日本の持つ影の部分の部分を直視し、危機管理をしていかないと、これから先うまくいかないと思うのです。

いろいろなレベルで伝統回帰が起こっているが、共通して言えることは関係性を重視すること。自然との関係性を重視する。人間同士の関係性も重視する。戦後の個人の時代からもう一度関係性重視の時代にすることが大切なのです。

6. まとめに代えて

(1) 上野村のミッション (自然とともに暮らす地域の創造、持続可能な地域のあり方を提示する、小さいことが有利な時代を迎えていることを立証する)

私の住んでいる上野村には村としてのミッションがあります。それは「自然と共に暮らせる地域をつくる」ことです。それから今までのような経済発展の論法ではなくて「持続可能な地域を作る」ことも実現したい。

これからの時代においては小さいことが逆に有利です。上野村は人口が 1,200 人であるからこそまとめて団結しているんなことをやって行ける。小さいからこそ矛盾なく実現できることを実証したいのです。そんなことを意識しながら私の村は「森と共に生きる」共同体を作っていこうとしています。実は共同体も明治になって外来語を翻訳するためにできた言葉です。江戸時代までこの言葉はありません。それまではどう言っていたかという、「うちの村、町」という言葉でした。

日本の村とか町と言ってもいいし社会と言ってもいい。その一つの特徴は、欧米人は社会とは、生きている人間だけで作るものだと思っているが、日本の伝統的な思想は、生きている人と自然と亡くなった人たちが社会を作っているのである。だからお盆に帰ってくる亡くなったおじいちゃんやおばあちゃんを迎えることを特別の宗教行事ではなく普通にやって来たのです。亡くなった人たちもこの社会を支え続けている大事なメンバーなのです。

上野村では社会とは「自然と生者と死者」が一緒になって作っていくものだと考えられてきました。この村はそういう雰囲気はまだ持っており、そのことも大事にしながら、亡くなった人たちがこれだいいと思っているのか？自然はこれだいいと思っているのか？ そんなことを絶えず視野に入れながら物事を判断していく。さっき言ったように風力発電は鳥が許可してくれたら作ってもいいということになります。これは、半分は冗談かも知れないが、半分は本気に思っている。自然が嫌がることをしたらいつか持続性が失われる。死者たちがうんざりすることを私たちがやって行けばいつかこの社会は持続性を失っていく。そんなことを根底に感じながら森と共に生きる村を作っていく。それが上野村のやり方なのです。

【休憩】

休憩後はフロアーからの質問に内山先生に答えていただく形式で進行した。

【Q&A】

Q1：ソーラー発電の導入は検討されていますか

A1：村人宅の屋根を使つてのソーラー発電は検討を進めており、予備的調査をしているところです。

ソーラーパネルは高価であり、村人に費用を負担させないで、どういう補助金が利用できるかなどを含め下調べをしているところです。今、パネル代が安くなってきており、また発電効率は上がってきている。ただ、環境問題から考えるとプラス面だけではない。パネルの中には有害物質が入っていることもあるので、廃棄する時は有害物質を回収するなどの保証ができる仕組みを作っておかないといけないという問題もあります。メガソーラーも心配なことの一つで、大規模につくり万一業者が倒産などすると放置される恐れもあり注意が必要です。

Q2：町内会の役員をしているが、加入率が 7 割を切っています。持続可能な地域を作っていく上で町内会は必要ですか。

A2：農山村の共同体も都市部の共同体も変わらないが、伝統的な共同体は一つの組織に皆を結集させることではなく、地域社会の中にいろんな共同体があることが大切です。例えば上野村では、集落ごとが一つの共同体といえるが、集落だけでおさまっているものではなく、もう少し広い共同体（江戸期の村くらい。歩いてコミュニケーションが取れるくらいの広さ）もあります。上野村全体も一つの共同体です。おおそ地域共同体は 3 つくらいあってそれぞれ役割が違います。さらにお寺の檀家さんの共同体があるし、職業別の共同体もある。最近では小さいお子さんがいらっしゃる人たちの子育て共同体もある。村で子育てをやろうとした場合、いろんな支援が必要となります。したがって、共同体社会は、いろんな課題ごとに共同体がある。それが繋がっていることが本来の共同体である。

都市部でも同じで江戸時代では長屋が一つの共同体であった。火消や大工の共同体もある。出身地別の共同体もあります。それで全体として助け合っているのです。今でもそうなのだが、上野村では一人暮らしの高齢のお年寄りのサポートは食堂付き長屋、10 畳間くらいの部屋があって、小さい台所があって、大きな食堂があって、それを使ってもらえばそっちで暮らすという手もある。地域の集落内の人がある程度応援することとなる。お風呂は役場の方でデイサービスセンターが担う。食事は給食センターから届く。いよいよ完全なサポートが必要となるとグループホームです。

これらは昔の共同体のやり方です。

一つの共同体で全部責任を負うと大きな負担になるので、いろんな共同体で何となく役割分担ができている。だから持続的な支援ができる。コミュニティや共同体は一つあってもダメでいくつもあることが必要。しかもそこは連携が取れると言うことが重要。今の町内会はたった一つの組織になっている。うまく機能している町内会もあるし、機能してないものもある。町内会を含めていろんな共同体やコミュニティをいかに積み上げるかが共同体作りの秘訣です。

Q3 : 共同体のよい面、悪い面について教えてください。

A3 : 人間同士がすり寄って生きていけば多少煩わしいこともあるし、面倒なことが起きるのも当たり前です。共同体というのは何の問題も発生しない社会を言うものではなく、どういう問題が起きて自分たちで解決しようとする社会です。明治以降の歴史は、共同体をこわしていく歴史でした。多くの人たちが知っている今の共同体は実は壊れた共同体なのです。つまり本来の助け合っている共同体ではなく、この見極めが重要なのです。

よく聞く意見ですが、自分は農山村出身なのだけど、その堅苦しさが嫌で、それで都会に出てきたと。人間同士近い距離で結びあっているのだから、そこからくる面倒くさは絶対にある。それはその通りです。それが嫌で都会に出てきた人が、よくサラリーマンをやっていますねと私は思う。

サラリーマンの社会ってすごく面倒くさいですよ。いろいろな面倒くささを抱えながらもそれを解決しながら社会が形成されている。田舎は面倒くさい、都会は面倒くさくないというのではなくて、実は面倒くささの内容が異なります。田舎の共同体は仕事内容には介入しない。ただ水田を持っている地域では水の管理は共同体の仕事であるのでここは勝手なことを言っちゃいけない。しかし、例えば去年イネを植えた田んぼで今年大豆を作ってもだれも文句は言わない。周囲に迷惑をかけなければ、やり方はそれぞれの自由です。逆に日常生活では助け合って暮らしているので、いろんな取り決めがある。都会の日常生活はそれぞれの自由でしょうが、仕事の仕方はがんじがらめに介入されることが多い。結局どっちがよりうっとうしいかということになります。私の場合、仕事の仕方で介入される都会の方がうっとうしいですね。妥当な介入であればいいが、そう思えないような介入がしばしば起こる。それがいわゆるサラリーマン社会で、煩わしさの内容が違っただけのことです。

上野村では問題が発生しても自分たちで解決できます。共同体は満場一致でしか意思決定は出来ず、多数決はあり得ない。なぜかというとならぬまで一緒に暮らしていく社会を前提としているからです。死んだ後もまだご近所さんが待っている。多数決方式は、負けた方になるほどと思えばいいが、自分たちの方が正しいのにも関わらず多数派工作で負けたとなると禍根が残る。

その禍根は、場合によっては何代にもわたって残ることがあり得る。だから、多数決でものごとを決める方式をとる限り共同体とはいえない。上野村も寄り合いで意思決定は多数決でなくて満場一致でやっています。もめると思えばあらかじめ根回し係をきめておいて、着地点を探り満場一致に持っていく。これには地域で一目置かれているような長老たちがその役目を負う。

僕のいる集落は全員が一つのお寺の檀家ですが、そのお寺を支えるために昔から大豆や小豆を持ちより寺へ納めていました。今はおカネになり、一軒 2000 円を集落の責任者が集めて寺に納めていたが、一人の長老からそれを止めようとの提案がありました。理由は、寺は我々の旦那寺ではあったが、今の住職は村から出て行き、お金の匂いがするときだけ帰ってくるような住職は住職ではない。お寺は村のお寺として我々が守っているのだから中止すべきである。ただし、個人として納めるのは構わない。との提案に対して、事を荒立てないでもいいではないか。気持ちはわかるけど今まで通りでいいじゃないかという意見があった。しかし、提案者の爺さんは「この問題は折り合いが付けられない」と発言した。つまり妥協できないということです。集落の人は爺さんの気持ちもわかるので、その時、司会者の集落の責任者は「彼からただいま折り合いが付けられないという発言がございましたので、この問題は以降一切議論しません」との発言。つまり決定できませんということ。結果的には爺さんの

主張が通った。爺さんの意見に賛成するしかないと言うことになり、満場一致で爺さんの意見が通った。折り合いがつかないと言うことは爺さんの意見に賛成するしかなく、以降は議論しないことになった。寄り合いとはそういう世界です。そこから誰かをはみ出してしまうことはしない。それが本来の共同体の社会です。明治以降の地域社会はボスができるようになったが、本来の共同体の姿ではなく、本来の共同体に戻す必要があります。

Q4 : 森と共に生きる上野村の村人たちの幸せ感は他の地域とどう違うのでしょうか。

もう一つお聞きしたいのは、伝統とは何かということを考えて場合、先生がおっしゃっていることとは違う伝統、つまり明治の開国精神を思っているような人もいるし、もう少しさかのぼり本居宣長などの国学の人たちは、神道の世界を日本人の精神であると考えている人もいるし、そうすると伝統は人によって違う部分があると思うが、ここはどう整理したらよろしいでしょうか？

A4 : 僕らが胸を張りいつていることですが、3年くらい前に村の中学生と小学生に対して教育委員会が意識調査を行いました。その中に将来どこで暮らしたいか？という質問をしたところ、関東地方の村ですから、多数派は東京、同じ群馬県内でも高崎とか前橋というような群馬県の中心都市で、若干名はニューヨークとか答えるのであろうと予測していたところ、結果は全員が上野村と答えていた。ほんとかよと思いました。実際、上野村はそんな雰囲気です。皆が自分の村に誇りを持っているし、自信を持っている。それが子どもたちにも伝播しています。

うちの村の出生率は2.4で、群馬県内市町村第一位です。子育てグループの共同体など自発的にできた支援体制も機能しており、山村留学制度もあります。小学校高学年から中学校まで、1年単位で村に来て暮らし、寄宿舎から村の小中学校に通います。村は毎年2,000万円赤字だが、村の子どもたちは生まれながらにして中学卒業までずっと一緒に、自分たちの中に小宇宙を作って生活している。それが山村留学で新しい生徒が入ってくるといい意味で攪乱されながらもちゃんと機能しています。今までに人間に使える補助金は無かったので、一億円の交付金があった時、それを基金にして始めたのが中学の修学旅行を海外ですることです。中学の英語の先生も採用条件を海外の山村の出身者にしました。もう一つの条件は自分の出身の村に中学三年生を連れて行くことです。今、ニュージーランドの先生なのでニュージーランドに行ける。他の国の山村を見てきてほしい。自分たちの村に足りないことは何なのか？いろんなことに気がついてほしい。毎年8月頃に行っています。もう一つの理由は、例えば年末になると関空から海外に何万人もの方が行っていますというニュースが流れます。それを見た子どもは、目に見えるところに旅行会社もないし空港もないので、都市部にいないと海外に行けないのだという気持ちを持ってしまうようです。そのような疎外感を昔は強く持っていました。うちの村は全員海外修学旅行に行けるからねと、田舎にいたらできないとの思い込みの解消を狙っています。

出生率が高いことは、第3子から一人月額3万円の村の子育て支援の影響もある。移住者の中には子ども11人という人がいて、30万円近く支給しています。その家には子どもが多いことを皆知っていて、近所からの差入れも多い。子どもたちも学校から帰ってくるとお返しの意味もあるのかよくお手伝いをします。そういうことを含めて村として将来を見据えて手を打っていく。トータルで考えると比較的幸せ度は高いかも知れません。

もう一つの質問に対するお答えですが、伝統回帰で明治以降に戻りたいということについては明治以降は日本の伝統を壊してきたのでそんなものはあり得ませんとしか言いようがありません。日本のおかしいところは、政治的な保守派は何ら保守的でない。今の安倍政権もそうで、「一億総活躍」などの変なスローガンをつくったり、またAIの時代に対応できるようにしなくちゃいけないと言うことで、変わることをばかりを要求している。それは保守じゃないでしょと言いたくなる。本居宣長のインド・中国を排するという話は、むしろ、あれは事実誤認に近い。なぜなら日本列島はいろんな地域から来た人で構成されている社会である。いろんな地域からの移住者で作り上げてきた社会であり、さらに

そこに古代には仏教が入り、道教が入り、儒教が入りして、絶えずいろいろなものが入りながら、日本の自然信仰から流れる日本らしさも生まれて、自然と人間の社会、自然と死者と生者の社会、そういう社会観を作り一つの共同体を形成していきました。そこらあたりに日本らしさが備わっているのです。

中国は大昔は違ったかも知れないが、今は自分たちで作った共同体を持たない社会です。殷、周、秦あたりで中央集権国家を作り、その結果として中央集権がつくる末端の支配機関が村となっている。だから逆に住民たちはそこに抵抗するために一族的な共同体を作った。自律的な地域共同体は生まれず、中央直結型の社会が出来上がっていて、今もそのような社会です。それに対して日本の場合は、各地域の人たちが自発的に自分たちの共同体を作りました。権力を持っている人たちがそれを押さえにかかったが、押さええたような、押さえられなかったような微妙な力関係で生きてきた。そこに押さえられなかった地域もあるし、かなり押さええたような地域もある。絶えず微妙なバランスがあったのです。そういう社会のありようが日本と中国の違いです。そういうことを本居が理解していたかということではなく、単に彼が勝手に幻想の中で描いた日本人像なのです。

Q 5 : 「おてんま」と「えいっこ」について

共同体として人の繋がりや強さを表すのに「おてんま」と「えいっこ」があることを上野村を訪問したときに教えてもらいました。橋とか道路とか直す場合は皆が出て行って無償で労力を提供する。あるいは自分の家の屋根が吹き替えの時期が来た時には村中が総がかりでそれをしていく助け合いの共同体があることを知りましたが、こういう伝統は今も続いているのでしょうか？

A 5 : 今は屋根の吹き替えは業者さんがやるようになってきました。「おてんま」と「えいっこ」はいずれの言葉も一般的には「結」です。自分達の村を作るために、また守るために公共的な形で仕事をする。例えば橋を直すのは「おてんま」、それに対して屋根の吹き替えなど助け合いで行うことを「えいっこ」といいます。

Q 6 : 冠婚葬祭の場合はいかがでしょう

A 6 : 今、村でお葬式をあげる場合に、村の中であげる場合と村外の葬儀場であげる場合がある。数は半々程度。村外の葬儀場が使われる場合は息子さんや娘さんが都市部において親が無くなった場合。このケースだとどうしても自分の勤めている会社の人たちが弔問に来られることを優先します。そうすると行きやすい場所となる。高崎などでやられるケースがそれなりにある。それ以外最近では、お通夜は自分のうちで、告別式は村の集会場のケースが結構多い。一番の理由は駐車場問題。村の中にはたくさん車を止める駐車場がない。お通夜はバラバラに来るので道に止めて何とか出来るのでよいのだが、告別式は一度に来るので止められない。村の集会場は車を 100 台くらい止める場所があるのでそっちの方を使うケースが多くなっている。村の場合でも、お葬式の形式は昔とは変わってきてはいるが、今も遺族が出すのではなくて共同体が出す。まだこれがそれなりに守られています。お葬式を出す共同体は独立している一つの共同体です。

Q 7 : 上野村を訪ねた時に 40 年間にわたって村長を勤められて黒沢さんは経済至上主義に進むのではなくて、今の森とか豊かな自然を背景に日本のトップランナーになるとおっしゃっていたとお聞きした。そういうリーダーに育てられた上野村はいいなあと思って帰ってきました。

A 7 : 黒沢さんは村長を 40 年間したが、彼の村作りの方針はぶれなかった。ちょうど高度成長期だったが、彼はそのまま高度成長期の流れで進めば日本人社会は壊れていくと見えたらしい。だからその流れにそのまま乗ってはいけないと。ただし、もちろんある程度の経済発展は必要だということは承知していた。しかし、経済至上主義になれば社会は壊れると考え、上野村だけでも本当の日本を残そうとしたのです。彼は職業軍人でした。海軍航空隊でシンガポールで隊長などを経験し、村に戻って来た。彼の残すべき日本というのは自然と共に暮らす日本、経済よりも助け合う日本。しかし、一定の経済発展にも努力された人でした。ずっと彼の部下で仕事してきた人たちが順番に村長になり、今の村長で 3 代目です。路線は当時とは全く変わりません。

【田中先生コメント】

お話を聞きながら、この講座の直近の観察会であるフィリピンのことを思い出しました。フィリピンの第一印象は平均年齢が23歳と若く、無茶苦茶に子どもが多いことです。子どもの洗濯物が各家庭にいっぱい干してある。今のお金の尺度で言えば豊かでないと思う。しかし、たくさんの子どもに囲まれた家族の中で生きていけるという幸福度は日本よりはるかに高いのではないかと思います。今日はそのことに繋がるお話をいろいろな側面からしていただきました。そして、それらのいろいろな側面が強すぎず（一極化せず）ゆるすぎず、つながりながらゆっくり長く続いていることに気づかされました。

今の社会を考えると、物事はすべてがんじがらめの仕組みでできていて、ギスギスしてお互いに疑心暗鬼の社会です。政治のありようも大きく問われるでしょうが、それは別にして、どうすれば柔軟な社会に戻せるかの確かな道が伝統回帰であり、その基盤には本来のコミュニティの復活があるのだと思いました。

哲学と言うと難しい顔をして分かったように拝聴する感じですが、内山哲学は笑顔で聴けることが出来、これぞ哲学であると思いました。明治以降に生きるうえで大事なものをことごとく潰してきたことを見直し、どのようにして伝統回帰するかということが上野村での実践を通じてイメージアップできました。

伝統回帰というものは、大きなものより小さなことの方が大事であること、それから量よりも質が大事であること、結果より過程が大事であること、政治や社会の在り方を考える場合でも、世の中の一色化よりもたくさん色があることの方がはるかに大切であること、そして結局はそれは関係性の問題であり、如何にしてその関係性を紡ぎ直せるかが大きく問われる時代に至っています。

森里海連環学を考える場合、自然に対する里の営みが非常に大事です。里と自然の繋がり、人と人との繋がりが重要だと言うことは今日のお話と共通のベースがあるのではないかと感じました。今日の講演は今年度の講座のハイライトだと私は思っていました。内山先生に無理やり来ていただいたことは、本当によかったと、あらためて思いました。これからの社会がどうのと言うより、我々個人が明日から「伝統回帰」へどのように“回帰”していけるかを自らに問う貴重な機会となりました。本当に有難うございました。感謝申し上げます。

以上